

疫病神と作戦会議だなんて、一体どういうこと何だろう。

疫病神とは、不運を運ぶ神様。だれも、会いたいとは絶対に思わないのに、なぜ主人公は、そんな嫌われ者を肩に乗せているのか。そして、何をたくらんでいるのか。気になりこの本を手にとった。

物語は、主人公の涼平が、運勢最悪の日に道ばたで疫病神とばったり出会うところから始まる。そして、同級生の倉田に不運を配る

ための作戦会議をして、わなをしかける話だ。ぼくは、疑問に思ったことがひとつある。

「不運とは、人間にとって本当にいらぬものなのか。あつたら困ることなのか。」

ぼくにとって、不運とは、うっかりお茶をこぼしたり、かぜをひいたり、ものをなくしたりするなど、何としてでも避けたい出来事。いつ起きるか分からない。しかし、ぼくの負の歴史を振り返ると、不運が起きるときは、いつも共通点がある。それは、気を抜いたり

調子に乗ったときだ。ぼくは絶対に大丈夫だと油断したときに限って、かぜをひいた。他にも、調子に乗って側転をマットなしでやったら、足を痛めた。

そこで、なぜ気が抜けたり、調子に乗ったりしたとき、不運が起きるのか。それは疫病神が言っていた。

「人間は、つい調子に乗っちゃう生きものなんだ。だから、おれたち疫病神は、人間にときどき不運を配って『思いあがるな、うっか

りするな。一生けん命、地道に生きていかなーいと思わぬ落とし穴が待っているんだぞ』と忠告してやる。それを乗り越えて、またがんばれば、人は大きくなれるんだ。」

つまり、不運とは、人間が成長するため、必要不可欠な物だったのだ。言いかえると、試験、乗り起えるべき人生の壁。今までの自分の甘さに気づかされ、意識ががらりと変わる。ぼくにもそんな経験が二つある。

一つ目は、四年生の夏のバドミントン大会

で、勝てると思っ、ていた相手に、負けてしま  
ったことだ。その日のために練習してき、たつ  
もりだ、たのに、思うように体が動かなか、  
た。もしかしたら、疫病神の不運のせい、かも  
しれない。以前の自分で満足したままで、気  
を抜いていた自分の心のすき間に、不運が配  
られたのだ。

二つ目は、母が大きな病気にな、ったことだ。  
母が入院して、る間、自分でやらないとい、けな  
いことが、ぐぐ、と増えた。これは、いつも  
母にしてもら、うことが、当たり前にな、って、い  
た。ぼくに、不運が配られたのだ。

現状に満足して、より高みを目指さな、か、  
た自分。やるべきことを人まかせに、して、いた  
自分。そんな自分に、「思いあがるな」と疫病  
神が気づかせ、てくれたんだ。

ぼくは、宣言する。不運を試練に変えて、一  
歩ずつ乗り越える。あせらず、地道につ、き進  
むんだ。その先に大きく成長した自分がある。